



第20号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447-0087：TEL. 0566-41-8522
 ：FAX. 0566-41-7761

『私の考える伊藤証信』

無我愛の思想家として知られる伊藤証信（一八七六一一九六三）は昭和七年、西端に無我苑を開いて七年目に、主著「哲学入門」を著わしました。これは真宗専門校での哲学概論の講義原稿を書き下ろした初心者向の著であり、優れた入門書として知られています。

証信は、人間の生活においては「生きることと、生の持続を望むことと、よりよき生を望むこととは、結局同じことになってしまふ」と述べ「生きるということとは、すなわちその欲望の働くことであり、それがまたやがて、生の持続発展を望むこと」と記しています。ここで出てくる「欲望」は、生きることを望まない人、自殺する人にはあてはまらない、ということにはなりません。生きることを望まない人は、「生そのものを厭うているのではなく、生の障壁および生の困難さを厭うているのであって、これによってむしろ生を望む心より強いことを示している」と説明し、自殺する人は「自然に死時の至るのを待たずして、故意に死んで行くのは、むしろそこに彼らの選択意志の働いている証拠ではないか、すなわち彼らはその事情に迫られて、おめおめと死時の至るを待つよりも、自ら進んで自己の肉体を殺すことによつてかえつてよりよく活きんとする」と述べています。

二九歳で「無我の愛」の自覚に至った証信にとつては、この生きる世界とは、このままでありがたい世界なのであつてもはや求道の必要はないと言えるでしょう。が、「生そのものが、このままで最上無上の生であること、否死んでも生きても、其の他いかなる変化が起ころうとも、そのまま最上無上の価値あることを信じている」とする「信念」に翁は何かの「根拠」をあたえることを目指します。そうすることが、よりよき生を求めていることの証である、ということになるでしょう。

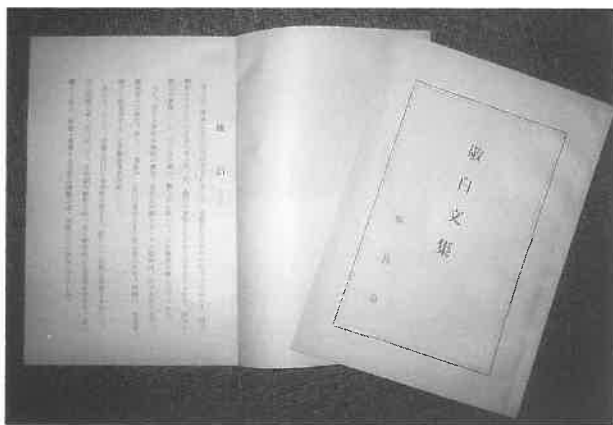
「哲学入門」は、序論以下第一章認識論、第二章形而上学、第三章道德論、第四章芸術論、第五章宗教論が組まれています。全五章の哲学的考察に西洋哲学の紹介を交ぜながら、証信の思想を随所で表現し、しかも、一般の人々の暮らしについても言及して、思い悩む人にとつては問題解決の糸口を示し心が軽くなるような温かな言葉を感じさせます。

☆

証信の思想について話したいと思えます。さて、証信の思想の凝縮したものが敬白文集にある「確信」という文章です。「確信」文は、証信の進生式、といつてこの「進生」というのは、証信が「死」

を「進生」と言っていたのですが、その機にもみんなで斉唱したり、証信が生きて苑主であった間は人が集まれば斉唱するものでした。私はこの「確信」文が証信の思想のエッセンスであると思います。私なりの理解でたいへんお粗末ですが、少し述べさせていただきます。

敬白文集は確信（其の一）、信念、宣言（其の一）、確信（其の二）、祈念、の五つの文集が書かれています。各々ともとても短いので、すぐ読めてしまいます。敬白文集の一番始めにある「確信」文は文の終わりに明治三十八年六月十日とあり、証信が「無我愛」の自覚を得た翌年、三十歳の時に書かれたことが分かります。



「吾人は、仏教なるが故に信ずるにあらざ、基督教なるが故に信ずるにあらざ、将又儒教なるが故に信ずるにあらざ、只、絶対の真理なるが故に之を信ずるなり。何をか絶対の真理という、曰く言ひ難し、暫く語を籍つて、之を無我の愛と名づけんか。」

まずここまでを考えてみます。仏教、基督教、儒教とここで挙げている宗教に、神道を加えて証信はよくいろんな考察をします。宗教はもともとの根は同じである、と簡単に言ってしまうはこのことを導くためです。例えば、「愛」について仏教ではこれを「慈悲」、儒教では「仁」、神道ではこれを「誠」、基督教では「愛」と言うことは、皆さんご存知のことですが、各々の宗教において愛がこのように教えられていて、みな同じことを言っている。そして「確信」の冒頭の文は私は宗教だからそれを信ずるのではない、とさっぱりとした強い断言の中に、意気込みがくみとれます。それに加えて、宗教は同じ根を持つという意味もほめかしています。逆も言えます。この真理は、仏教のものであり基督教のそれでもあり、儒教にもある、そういう全てにある、という風に言っておいて、それらのどれでもない、と。「あるけれどない、ないけれどある」という表現は仏教の色即是空の考え方ですね。色即是空はちよつとこじつけの解釈ですが、証信の思想というのは、やはり東洋の、しかも僧門をめざして断念してはいますが仏教というものが確かに基盤になっています。

「確信」の文章を先に進めます。

「夫れ、宇宙の本性は無我の愛也。宇宙を組織せる一々の個体は、其の本性において、無我愛の活動也。即ち、一々個体が、自己の運命を全く他の愛に任せ、同時に、全力を献じて他を愛する、之を無我愛の活動という。」

先ほどの文章で「無我の愛」と出てきたことを、今の文章によって本格的に取り上げてみたいと思うのですが、その前に「宇宙」であるとか、「一々の個体」であるとかいうことについて、述べておく必要があります。一々の個体は宇宙にある五種のもののことです。一つ目は鉱物、火・水・空気といったもの、二つ目は草や木などの植物、三つ目は鳥・禽獣類の動物、四つ目は人間、五つ目は神社、聖なる域にあるものです。宇宙はこの五種から成り立っていますよね。そして、個々は相互を合入れない、独立したものです。内面的に意識を相互に結合して、意識を一つにすることはできない、そういう意識点です。どういふことを言っているのか、例を出すと、人は多くは互いに結合して、一つの家庭なり会社という組織を作ります。でも、結合した個々の意識は、やはり皆別々です。けっして合体して、一つの意識になることはできない。私が家庭の一員となっても、市役所の職員になっても私の意識は依然として私の意識であって、他の誰の意識もそれにかわることはできません。横道にそれましたが、絶対的に独立している

ものは、分解できない、結合合体のものでありえないから分解できない、一つの意識点として不生不滅だということが導けます。意識点は永久不滅と言えらるんですね。これは、物質微分子の不滅ということにもなり、ちよつとインドの霊魂不滅論を連想しますが、そういう根拠のものなんです。

そこで、話を元にもどします。「宇宙を組織せる一々の個体」というのは、そういう宇宙にある五種のすべての意識点を言っているんです。それらが生きている、つまり「欲望」を抱えて生きているんです。鉱物や火などに意識はあるのか、最近の科学で分かっています。有機的か無機的かということによるんですが、鉱物に意識がない、ともまた言いきれない、そのくらいにしておいてください（ちよつと苦しいですけど）。欲望を限りなく満たそうとしている各自は、意識の開發と自由とを望んでいます。どういふことかという私の意識は直観による表象を日々磨こうとしています。例えば他人の内面を正しく理解するために、類推、ということによって表象、つまりとらえようとする事物を完全なものにしようとして努力しているのですし、自由、ということについては言えば自分が何かを実行する必要があるのか、または実行出来るのかを見極め、実行を決心し、いったん決心したら決心を持続し、実現する、こういう意識の統一ができていくかどうかということが、内面生活の深さにかかわっていますよね。これを成し得る人が意識

の自由を得ている、ということになると思えます。繰り返しますと煩惱によって邪魔されず、実行できることが、真の意味で「自由」である、ということですが、意識の開發と自由とをめぐっているとすれば、自分自身だけではなく、他に対してもそれを要求するようになり、結局自他すべての欲求を満たすようになってしまう、と思えます。この努力、自他の凡ての要求を満たそうとするのが、愛、ということであると思えます。そういう愛を宗教はみな道徳の根本にしています。



さて、〈確信〉の本文を続けたいと思
います。

「吾人は、久しく、宇宙と自己との本性
を覚らず、畏りに、我執と憎悪とを以つ
て、自ら煩惱し来りき。而して、今や
則ち廓然大悟、竟に絶対的平安の境を
得たり。茲に翻つて思う、釈迦・基督・
孔子等の諸聖の道、亦実に之に外なら
ざりしを。」

人の意識が蒙昧で、意志も自由ではな
い状態は、生きる欲望を満たすことによつ
て意識の統一、意志の自由を得ようとし
ます。〈欲望〉というのはこのように私
の意識が不完全であるために生じるもの
です。私の意識が完全であれば、欲望は
生じません。人は欲望を満たすべく、意
識を完全なものに近づけようとしています。
愛を通して宇宙と私が一体であるような
自覚を得る過程に進むわけです。これが
無我愛の活動、ということになると思い
ます。でも欲望が本当に満たされた時、
本来欲望は必要のないことが明らかにな
る——現実的には難しすぎますよね。た
だこのように考察していけば、そういう
ことになるんです。絶対的平安の境とい
うのが、欲望のない状態なんでしょうか。

☆

とても息のつまる話を続けてきました
ので、少し、くつろいでいたくために
も、ちょっとここで、生の〈欲望〉を忘
れたらどうなるか、ということを考えて

みます。知識を求め、道徳を求め享楽を
求め、それはそれは張り詰めた気持ちを持
続させた日常なのですが、心のたがを
はずしてみたとします。私には今、三歳
になる子どもがいるのですが、その子ど
も目の通して世界を見た場合というの
が、ある種、欲望からはなれた心で見た
世界だと言えると思います。例を出すの
に証信の「哲学入門」第四章芸術論の中
の一節を述べます。少し長い引用になり
ます。

「見よ、雨はぼつりぼつりと空から落
ちて来てビワの木を潤す。すると、ビワ
の木の股に、今までじつとしてかがんで
いたカタツムリは、その潤いに力を得て
やがてその殻の戸を中から静かに押し開
き、ぬるぬるとその頭を出し、頭の前か
ら四本の角を、すうっとつき出す。そう
してでこぼこのビワの木の枝をそろそろ
とはって行く。大きな蟻が一匹何処から
ともなく、忙しそうにやって来てそのカ
タツムリにぶつかり、殻をはい上がって、
一本の角の先にかじりついていた。カタ
ツムリは驚いて、たちまちその角を頭の
中へ縮み込めたのはよいが、それと一緒に
蟻の足を一本巻き込んでしまった。蟻
は、こりやたらまらぬと、力任せにその足
を抜き出そうとして、もがくけれども、
中々抜けないのみか、もがけばもがくほ
どカタツムリはその頭を縮める。そうし
て、とうとう蟻もろとも其の頭を殻の中
に入れて、戸をしめてしまった。それと
同時に、そのカタツムリは支えるものが
なくなつたので、ぼたりと地べたに落ち
た。そうして丁度その時ビワの木の麓に

うづくまって、虫の出て来るのを見張つ
ていた大きな殿様蛙の鼻柱を、したたか
打った。蛙は、おどろいて目をぱちくり
させながら、びよんびよん飛んで行った。」
少し長い引用になりましたが、現実
は滑稽そのものであり、〈欲望〉を忘れて
世界を見たとき、物の滑稽さが分かりま
す。のんびりとした気持ち、ゆつたりと
して居る時に物の滑稽が分かるというの
は、生きていることの愉しみを欲望の生
活の中で失っていないか、と省みさせま
す。

☆

戻りまして〈確信〉の最後の文章に入
ります。

「この道は、其の広大なること、其の悠
久なること、共に宇宙と同じく、言語
の道耐え、思慮の方尽く。自今、吾人
が執る所の云為行動、幸に、この大真
理の幾分を顕わすを得ば、吾人の本懐
之に過ぎざる也。」

ギリシャ時代の自然哲学から懐疑的反
省、スコラ哲学、デカルトの懐疑主義、
カントの批判哲学このように西洋の哲学
史を見渡しても、それは広大な道ですよ
ね。経済界を見ても共産主義、資本主義、
様々に展開し、思想の自己矛盾を淘汰す
るため日々進歩していると思いませんか。
私たちの現実生活というのは、そうい
う進歩発展を個々が個人として、組織と
して、社会として、国家として表現する

場ということにもなるわけです。

私の考える証信というのは、西洋哲学
の克服できないところを東洋哲学、具体
的には仏教の教えによって乗り越えよう
とした、と見えます。ですから証信の著
作を読んでいて考察の仕方について、哲
学的というより人の情や宗教性がまじつ
ているように感じるのは、これも証信独
特の思想である、と思います。そして、
そういう思想の方がむしろいい。人の身
体に合わせて立体裁断して作った衣のよ
うに、しっくりとなじんでくる、僭越で
すが、私はそんな風に証信をとらえてい
ます。

(元無我苑職員 鳥居 亨子)



名誉村長特別講演会 『書と私』

去る一月十八日に哲学たいけん村の名譽村長・梅原猛氏の講演会が開催されました。当日は三百十九名の方にプロジェクターによる映像を用いた、先生の飽きることない講演を聴講していただきました。講演の冒頭部分の要約は以下のとおりです。

☆

下手な字と個展

子供の頃より数学が得意で習字と教練が苦手であった。のちに本を出版するようになっても字が下手なのは変わらず、出版者にはその下手な字を読むための社員を雇わなければならないぐらい下手であった。

ところが、東京の弥生画廊という高山辰雄や平山郁夫など画壇の巨匠の個展しか開かないという画廊より個展開催の依頼があった。しかし、巨匠の作品と並べられるものではないと、数年間固持し続けていたが、この頃、少し考えが変わってきて、昨年の年末に個展を開催することとなった。

禅寺と書

考えかたが変わったというのは、京都

の禅寺を周るようになって、夢窓国師、大燈国師や一休禅師のそれぞれ個性がある書を見るようになって、自由で気持ちのこもった書に興味を持った。しかし、世間を見渡してみると、字はうまいが面白くない書家ばかりであることに気づき、自分で書く事にした。すると周りの人が文句がおもしろいとか風格があると言われる。そして、三浦影生氏により、書にろう染で色をつけて頂くことによって芸術らしいものになったと感謝している。

お知らせ

平成一六年度 涛々庵茶会

平成16年度「涛々庵茶会」席主表

開催日	席主	開催日	席主
4月25日	杉浦 時子 (宗時)	10月24日	山田 昇 (宗昇)
5月23日	小島 和美 (宗美)	11月28日	杉浦 とめ (宗登)
6月27日	沢田 教子 (宗教)	12月19日	小笠原 利 (宗紅)
7月25日	小沢わさ子 (宗和)	1月23日	杉浦 伸子 (宗伸)
8月22日	磯貝 勝代 (宗代)	2月27日	瀬田みな子 (宗美)
9月26日	小笠原美美 (宗文)	3月27日	安形 亮照 (宗照)

※ 時間は各日とも10時～15時 (立礼茶席は16時まで)

4月から涛々庵茶会開催日に三曲 (琴・尺八・三味線) の演奏をお楽しみいただけます。演奏は涛々庵茶会開催日の午前中一回、午後二回行います。

癒しの音 〜絃琴演奏会〜

何かを語るような

何かに語りかけるような

とき 四月二十九日 (木・祝)
午後二時より

無我苑研修道場

演奏者 永川辰男氏 (絃琴楽風会主宰)

はじめての瞑想

瞑想に興味はあっても、実際はよく分からないという方が多いのではないのでしょうか? そんな方に体験していただきたいのが、はじめての瞑想です。精神の統一や心身のリラクセスを感じることができるといいます。

とき 五月一五日 (土) 午前十時より

無我苑研修道場

講師 木村則昭氏

(NHK・中日文化センター 氣功健康法講師)

前期哲学講座

メインテーマ

『袖の美学』

とき 六月五日から (四週連続土曜日)

各回とも午後二時より

無我苑研修道場

講師 久野 昭氏 (無我苑顧問)

天野雅郎氏 (和歌山大学助教授)

ツベタナ・クリステワ氏

(国際基督教大学教授)

編集室より

先に記しましたように、本年度の名誉村長特別講演会の演題は『私と書』でした。無我苑では梅原先生のお書きになった色紙 (複製) を販売しております。色紙の文句は『天翔ける心』 (千五百円) と『夢を追う』 (二千円) の2点です。先生ならではの独創的な字がしたためられていますので、是非お買い求め下さい。

